SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

18世紀の博物学とルソーの植物採集

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2017-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上利, 博規 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010416

18世紀の博物学とルソーの植物採集

上　利　博　規

序

18世紀は博物学の時代であり、その時代を生きたルソーも博物学、とりわけ植物学に関心を示し、近年植物学者としてのルソーが一層注目されている。不平等を作り出す社会よりも「自然状態」を重視するルソーが植物に関心を示すことは当然のようにも思われるが、無名であったルソーを一躍有名にした『学問芸術論』において「学問・芸術が完全なものへと進歩するにつれ、われわれの魂は腐敗した」と断ずるルソーは、当時の流行であった博物学、植物学をすんなり受け入れることができたのであろうか。

本論文では、２つの視点からこの問題について考えたい。まず、そもそも18世紀の「博物学」とはいかなる学問であったのかについて、伝統的な自然誌・博物誌との違いから考えたい。「博物学」は英語ではnatural hisotryであるが、これが自然誌、自然史、博物誌、博物学といういくつかの訳語をもっていることは、historyという語の古代ギリシア語[1]以来の歴史的発展とともに広く知られているところである。ここで注目したいのは、プリニウスに代表される古代の「自然誌」は、ルネサンス的展開を経て、バロック時代の学問化・科学化によって「博物学」という一つの学問となったという点である。そして「博物学」は18世紀にはリンネとビュフォンによってその頂点を迎え、19世紀には「生物学」「地質学」などにとってかわられる。バロック時代においてnatural hisotryに起こった大きな変化とは何か、その学問化とはいかなる事態か、これを第一章において検討し、ルソーと植物学との関わりについて考える準備としたい。

第二の観点であるルソー自身の植物学との関わりについていえば、ルソーは若い頃にヴァランス夫人たちと植物採集を行ってはいたが、そこに積極的な意

[1] 動詞ἱστορέωは探究する、知る、記述するという意味で、名詞形ἱστορίαは探究、知、記述などの意味をもつ。

味を見いだせずにいた。彼が本格的に植物採集に取り組むようになったのは、『エミール』によって逮捕状が出され、スイスに逃れた1762年以降のことである。もともとルソーは若いころからフランスとスイスの国境周辺の土地になじんでいたが、そこはアルプスを眺めることができる地であると同時に、「ジュラ紀」の語源ともなったジュラ山脈があった。1760年代のルソーは、リンネの『自然の体系』を携えてフランスとスイスの国境付近のジュラ山脈周辺、あるいはイギリスに逃亡中には美しい自然景観で有名な観光地である中部のアシュボーンの山のふもと、さらにフランスに戻ってからはスイス国境に近いグランド・シャトルーズ周辺の山々で植物採集を行ったのであった。1770年代のパリでの晩年にも、ルソーは最後の楽しみを植物採集に見出していた。植物学、植物採集の何がルソーをひきつけ、ルソーは植物学、植物採集の中に何を見いだしていたのか、これが第二の問いである。

1　18世紀の博物学と植物学

(1) 近代的博物学への過程

生物の研究は古代ギリシアから見られ、アリストテレスには『動物誌』(Περὶ Τὰ Ζῷα Ἱστορίαι、Historia animalium)、『動物発生論』(Περὶ ζωων γενεσεως、De generatione animalium)、『動物部分論』(Περὶ ζώων μορίων、De partibus animalium)をはじめとして数多くの著作がある[2]。これら古代の動植物に関する研究を包括的な立場から記述し、自然誌・博物誌という考えの基礎を作ったのはプリニウスの『自然誌』(Naturalis Historia) 37巻である。この著作は、宇宙から始まり、動物、植物、鉱物という、いわゆる「自然の三界」について網羅的に記述した。

中世は、キリスト教における神の創造が前提となるために、自然そのものを探究しようとする気運はたかまらなかったが、それでも12世紀に入るとアリストテレスの自然学に関する著作が知られるようになり、アルベルトゥス・マグヌス (Albertus Magnus, c.1193～1280) はアリストテレスに倣って『動物について』(De animalibus)、『植物について』(De vegetabilibus) などを著した。また、ドミニコ会の修道士ヴァンサン・ド・ボーヴェ (Vincent de Beauvais, c.1190～1264) による『自然の鑑』『諸学の鑑』『歴史の鑑』の3部からなる『大いなる

[2] アリストテレスの著作には、これら動物の研究のほかに植物の研究もあったともいわれるが残っていない。それを補うかのように、アリストテレスの友人であるテオフラストスによる植物に関する著作『植物誌』(Περὶ φυτῶν ἱστορία、Historia plantarum) がある。

鑑』(Speculum Maius) が生まれた。『自然の鑑』(1244) は32巻で3,718の項目を含んでおり、天地や生物[3]を被造物という観点から記述することを通して創造者を讃えようとしている。同じ頃、バーソロミュー・オブ・イングランド(Bartholomew of England、1203〜1272) が19巻からなる『事物の性質について』(De proprietatibus rerum) を著し、「自然の三界」について[4]詳細に記述している。こうして、中世後期には自然を合理的に理解しようとする考えが広がっていった。

ルネサンスに入ると異教的関心が花開き、メディチ家のプラトン・アカデミーなどで自然魔術研究が盛んに行われたことは周知のところである。世俗的には大航海時代によって未知の生物がヨーロッパに持ち込まれ[5]、印刷文化の興隆により図版が挿入された報告書などが多数刊行され、人間を含む生物あるいは自然の多様性について強い関心がもたれるようになった。

ルネサンスの自然魔術研究がやがてバロックにおける自然科学へと発展したように、ルネサンスにおける自然研究は学問的態度を準備する。たとえば、後にリンネが「植物学の父」の1人にあげたオットー・ブルンフェルス (Otto Brunfels、1488〜1534) は、神学者であると同時に医学的な立場から『本草写生図譜』(Herbarium vivae icones、1530〜1536) を刊行したが、そこにはデューラー (Albrecht Dürer、1471〜1528)[6]の弟子のハンス・ヴァイディッツ (Hans Weiditz der Jüngere、1495〜c.1537) による詳細な木版画による図版が挿入され、採集した植物を魔術的要素を排して精密に描写しようとする[7]姿勢は後代に大きな影響を与えた。

そのほか、ルネサンス後期には、ゲスナー[8] (Gesner Conrad、1516〜1565) の『動物誌』(Historiae Animalium)、『植物誌』(死後刊行)、ピエール・ブロン

---

[3] 植物については、第9巻から第14巻が扱う。

[4] 植物誌 (De herbis et arboribus) は第17巻である。

[5] 世界各地から珍しい動植物がヨーロッパに持ち込まれるにとどまらず、世界各地に赴きそこで発見した動物や植物に関する自然誌を刊行したり、植物を求めて世界中を探検するプラント・ハンターと呼ばれる植物採集者たちが登場する。彼らは、食べ物や産業に役立つ植物の発見や、観賞用植物の輸入を行い、やがてはアジアにおけるお茶やゴムのプランテーションなどの植民地経済を導いた。

[6] 自画像で有名なデューラーであるが、「野うさぎ」(1502)、「芝草」(1503) など、自然を詳細に描写した作品も残っており、デューラーはポリュクレイトスやウィトルウィウスの比例など古代の定型化、理念化された自然観の影響を受けたイタリア・ルネサンスとは異なった自然観をもっており、それが弟子のヴァイディッツに継承されたと考えられる。

[7] 傍点は論者による。以降の傍点についても同じ。

[8] 彼によるラテン語による命名は、やがてリンネに採用されることになる。

(Pierre Belon、1517～1564) の『鳥類誌』(L'Histoire de la nature des oyseaux、1555)、レオンハルト・フックス (Leonhard Fuchs、1501～1566) の『植物の注釈書』(De historia stirpium Commentarii insignes、1542)、ウィリアム・ターナー (William Turner、1520～1568) の『新本草書』(A new Herball、1551～1568) をはじめとして、数多くの動物誌、植物誌が作られた[9]。

このような医学的な立場からの動植物への関心に導かれながらもなお未定型であったルネサンス期における自然への関心は、バロック期における学問としての博物学の発達を促した。バロック期のはじまりに登場するフランシス・ベーコン (Francis Bacon、1561～1626) は「自然の解明」を目標とした『大革新』(Instauratio Magna) の起点としての『学問の進歩』において、新しい時代の学問の状況にふさわしい知性と学問の体系を構築しようとした。アリストテレスのオルガノンに対する「ノヴム・オルガヌム」[10]である。また、デカルト (1596～1650) は『精神指導の規則』(Regulae ad directionem ingenii、1651年公刊) の第4の規則として、「何ら特殊な質料に関わりなく、順序 (ordo) と計量的関係 (mensura) とについて求められうるすべてのことを、説明する一般的な学問がなければならない。それは…古くから使われている普遍数学 (Mathesis universalis) と呼ばれるべきである」と述べ、定量的思考への道を明確に示した。

こうした学問化・科学化への志向は、1660年代のイギリスとフランスにおいて科学アカデミー創設へと結びつくが、観察・実験による科学化への動きを促進したものの一つがレンズの使用による望遠鏡と顕微鏡の発明であり、望遠鏡の発明は天文学に大きく寄与し、顕微鏡の発明は動物、植物の分野において大きく寄与した。1590年前後の顕微鏡の発明は、オランダのメガネ職人のヤンセン親子によるものとされているが、1665年にはロバート・フック (Robert Hooke、1635～1702) が自分で作った顕微鏡を用いて図版を描いた『顕微鏡図譜』

---

[9] 彼らの中には植物園に関わった者も多く、たとえばボローニャ大学の植物学教授アルドロヴァンディ (Ulisse Aldrovandi、1522～1605) は植物園を作り、ピサ大学教授アンドレア・チェザルピーノ (Andrea Cesalpino、1519～1603) はピサ植物園園長でもあり、『薬草園』(Hortus Medicus、1588) を著したヨアヒム・カメラリウス (Joachim Camerarius、1534～1598) はニュルンベルクの庭園で植物を採集・標本していた。イギリスでは『本草書』(1597) を著した医師のジェラード・ジョン (Gerard John、1545～1611?) がホルボーン植物園を管理していた。

[10] 『大革新』第2部として書かれた「ノヴム・オルガヌム」は「自然の解明についての指標」という副題をもち、『大革新』という構想が「自然の解明」という目標に向けられていたことを象徴している。拙稿「F. ベーコンにおける自然の解明と職人技術」(『人文論集』59-2、2009) 参照。

(Micrographia) を刊行している[11]。以降、スワンメルダム (Jean Swammerdam、1637～1680)、18世紀に入るとニーダム (John Turbeville Needham、1713～1781) の『顕微鏡による新発見の説明』(An account of some new microscopical discoveries、1745)、レダーミューラー (Martin Frobenius Ledermüller、1719～1769) による『顕微鏡による心と眼の娯しみ』(Mikroskopische Gemüths- und Augen-Ergötzung) など、顕微鏡観察による報告が続く。

また、バロック期には、薬草研究とは異なる観点からの植物園に関する著述も多数現れた。これは、絶対王政を背景とした庭園・園芸文化の興隆によるものであり、楽しみや癒しのための庭園で育てられている植物についての報告書である。たとえば、シャルル・ド・レクリューズ (Charles de l'Ecluse、1526～1609) はウィーンの植物園の管理を行っていたが、そこで目にしたオーストリアの植物やチューリップなど外国産植物を『稀産植物誌』(Rariorum Plantarum Historia、1601) として記した。そのほか、フランスのピエール・ヴァレ (Pierre Vallet、c.1575～c.1650) の『国王アンリ4世の庭園』(Le jardin du roy très chrestien Henry IV、1608) は花好きだったアンリ4世の妃のために書かれた本である。園芸ブームが始まりつつあったイギリスではジェームズ1世の顧問薬剤師でありチャールズ1世の王室主席植物学者でもあったパーキンソン・ジョン (Parkinson John、1567～1650) が『陽のあたる楽園、地上の楽園』(Pradisi in Sole Paradisus Terrestris、1629) という園芸書で植物の栽培方法について書いた。ほかにも、ドイツではベスラー (Basilius Besler、1561～1629) が『アイヒシュタットの庭園植物誌』(Hortus Eystettensis、1613) を、オランダではド・パス (De Passe、1590～c.1664) が『花の園』(Hortus Floridus、1614) を、ベルギーではヨハン・テオドール・ド・ブリ (Johan Theodoor de Bry、1562～1620) が『花譜』(Florilegium Renovatum et Auctum、1641) といった園芸目録を著した[12]。

とはいえ、当時の庭園が単なる観賞用のためだけだったわけではなく、スウェーデンのウプサラ大学で医学を教えていたルードベック (Rudbeck Olof、1630～1702)[13]がスウェーデン初の植物園を作り『薬草大全』(Campi Elysii、1701)

---

[11] フックは顕微鏡によって「細胞」(cell) という単位に気づいたが、19世紀には顕微鏡の観察によって動物も植物も「細胞からできている」という点において共通していることが理解され、両者を統合した「生物学」という分野が生まれた。

[12] こうした本草学や庭園目録の中には、オランダから日本にもたらされ、平賀源内が手にしたものもある。

[13] 1690年に長崎にやってきて『日本誌』を著したケンペル (Englebert Kaempfer、1651～1716) は

を著し、またドイツ南東部のレーゲンスブルクに植物園を開いた元薬剤師のヨハン・ヴィルヘルム・ヴァインマン（Johann Wilhelm Weinmann、1683～1741）が『薬用植物図譜』（Duidelyke vertoning eeniger duizend in allevier waerelds deelen wassende、1736～1748）を出版したように、植物図鑑の第一の役割はなお薬草の整理にあった[14]。

以上のように、ルネサンスからバロック時代にかけて、大航海時代とプラント・ハンターの活躍によってそれまで知られていなかった種類の自然物について知られるようになり、植物園でたくさんの種類の植物が栽培され、顕微鏡で観察され、それらについて記した文献がきれいな図版を伴って多数生み出されるようになった。そうなると、多様性を楽しむだけでなく、多様性をどのように整理・分類するかが問題になる。

（2）多様な自然の列挙から「分類」へ

この問題の解決に向かったのが[15]、イギリスのジョン・レイ（John Ray、1628～1705）であり、フランスのトゥルヌフォール（Tournefort Joseph、1656～1708）であった。彼らの著作、すなわちレイの『植物新方法論』（New method of plants、1682）やトゥルヌフォールの『植物学の基礎』（1694～1695）、『植物学指針』（Institutiones rei herbariae、1700）などの著書のタイトルが示すように、植物誌に「方法論」や「基礎」「指針」が求められ、いかなる原理に基づいて多様な植物の整理・分類するかいう方法や原理への反省が生まれている。ここに、伝統的な自然誌・博物誌とは異なる近代的な博物学の誕生を見ることができる。それまでの伝統的な分類法は経験的であり、ともすると薬草のように人間にとっての有用性という観点から行われてきたものや、直観的印象による差異に基づくものが多いの対し、学問的方法論の確立は植物自身の形態や構造などの特質によって分類を行おうとするものである。

『植物誌』（1686）で「種」という概念を確立したといわれるレイの場合は、調

ルードベックの弟子であり、リンネはルードベックの息子の弟子である。

[14] ヴァインマンの『薬用植物図譜』は量もさることながら、デューラーが用いていたエングレーヴィングを改良したものとして17世紀中頃に開発されたメゾチント印刷により、中間色を用いたカラー図版の美しさによって知られている。中間色を用いることができるということは、3次元的表現が格段に進化し、生物をよりリアルに見せることができる。植物学の進歩を支えたものの一つとして、こうした印刷技術の進化があり、その美的効果の影響もあったことを見逃してはならないであろう。

[15] 命名という点でこの問題に取り組んだ先駆者としては、スイスのガスパール・ボアン（1560～1624）の『植物一覧表』（1623）による属と種による二名法を挙げることができる。

査旅行による植物の観察に基づいて植物を分類し、「種」はある固有の特徴を何世代にも渡って保持すると考えた。つまり、一つの「種」は同じ「種」を産み続け、そこから別の「種」が生まれてくることはないというのである[16]。ここでいう「固有の特徴」とは、従来の形態学的な特徴であるだけでなく、動物の場合には解剖などの手助けを借りて理解された構造的生理的特徴も含んでいる。また、トゥルヌフォールの場合には、分類の基準を花の形に設け、植物を花の形に従って22のクラスに分け、さらに果実や種子の形などにより下位の区分を行った。すなわち「種」という概念だけでなく、より上位の概念との関係づけを行った。

このような17世紀の成果に基づいて、18世紀にはリンネ（Carlvon Linne）の『自然の体系』(Systema Naturae、1735）とビュフォン（GeorgesLouis Leclerc de Buffon、1707～1788）の『一般と個別の博物誌』(Histoire naturelle, generale et particaliere、1749～1800）が現れ、命名・分類に関して人為的分類法と自然的分類法の対立を見ることになる。ここでは両者の違いについて立ち入ることなく、むしろ18世紀の両者の「分類」の立場がそれまでの自然誌や博物誌といかに質的に異なっているかについて、ミシェル・フーコーの『言葉と物』を手掛かりに検討してゆこう。

フーコーは『言葉と物』において、近代西欧の文化の「エピステーメー」がバロック時代である「古典主義時代」を挟んで二つの断層があると考え、第一部で「古典主義時代」の「エピステーメー」の特徴を述べ、第二部でそれに続く時代の「エピステーメー」との違いを述べる。その論に従えば、古典主義の時代を特徴づけるのは「マテシス（mathesis)」と「タクシノミア（taxinomia)」であり、前者はデカルトからライプニッツに受け継がれる代数学、普遍数学であり、後者は記号という体系に従って対象を秩序付け分類し「表」化することである。この二つの方法によって、多様な自然は共通な単位によって定量化され計測可能なものとなり、記号を通して対象の同一性が与えられると共に他の対象との差異が明確化され体系における位置づけが可能となる。

こうした「マテシス」と「タクシノミア」という「古典主義時代」の新しい「エピステーメー」に基づいて新たに生まれたのが、一般文法、博物学、経済学であるとフーコーは考える。バロック時代における博物学は、「マテシス」と

[16] このようなレイの考えは、「種」の同一性を主張しているのみならず、他の「種」との不連続性も主張しており、隣接する「種」との交配による雑「種」が生まれる可能性を認めないことになる。

「タクシノミア」という点において、それまでの自然誌、博物誌とは異なると考えるのである。そして、そのような新しい「学問としての博物学」を支えていたのが、「古典主義時代」の言語の役割であった。フーコーは次のように述べている。「言語とは、分節化された指示作用の仕組みによって、類似を命題的関係のなかにおさめるものである。つまり、『ある』という動詞を基礎とし、『名』の綱目によって顕示される、同一性と相違性の体系（un système d'identités et différneces）のなかにおさめるのだ。古典主義時代における『言説』の基本的任務は、『物に名を付与し、この名において物の存在を名ざす』(d'attribuer un nom aux choses, et en ce nom de nommer leur être）ことである。二世紀にわたって西欧の言説は存在論の場であった。つまりそれは、表象一般の存在を名ざすとき、哲学、すなわち認識の理論および観念の分析であり、表象された個々の物に適切な名を付与し、表象の場全域にわたって『よくできた言語』の網目を張りめぐらすとき、学問――すなわち名称体系と分類法――だったわけだ」(p.135f.、邦訳p.146f.)。言葉が物を分節化し、体系的な表を表象可能とし、その体系の中の位置を示す役割を果たすようになったことが、博物誌が単なる多様性の記述ではなく、「学問」としての博物学として成立した基盤だったというのである。

フーコーは、そのような言語の特徴を「第四章　語ること」(Parler）で論述したのち、「第五章　分類すること」(Classer）の「二　博物学」において、「古典主義時代」に現れた博物学について、「『博物学』の領域を、古典主義時代はどのように規定していたのであろうか」と問うて、次のように答えている。

まず、博物学が出現するために必要だったのは、「『記述』がもっぱら『自然を対象とする』ものになること」(l'Histoire devienne Naturelle）であったという。つまり、自然が「語られる」とき、それまでは「観察」された（客観的な）自然と、その自然が作り出してきた（物語的）「意味論的網目」とが一体となっていた、すなわち「観察」「記録」「お伽話」が区別されていなかったが、ヨンストン（ス）の『四足獣の博物誌』では意味論的物語的部分が削除されており、「本質的相違は、まさにヨンストン（ス）におけるこの『欠如』にある」[17]。「そ

[17] ヨハネス・ヨンストン（Johannes Jonston、1603～1675）は、江戸時代に著書が翻訳された際、所有格の「ス」が誤ってそのまま「勇斯東私（ヨンストンス)」とされた。
彼の著書には、四足動物、鳥、魚などの詳細の銅版画による図版が掲載されている点でも注目される。しかし、図版には、一般的な動物に並んで翼をもったライオンやドラゴンも含まれている。このことを考えれば、ヨンストンが自然観察に徹底していたわけではなく、なお物語に引きずられている側面があるといわざるを得ない。

こでは、動物に関する意味論は、死んで不要になった部分とでもいうようにそっくり欠落している。動物と絡みあっていたさまざまな語がほどかれて取りさられ、解剖学的要素、形態、習性、誕生、死をもつ生身の存在がむきだしのままあらわれているのだ。博物学は、語と物とのあいだにいまや開かれたこの隔たりのうちにみずからの場を見いだす」(p.141、邦訳p.152f.)。つまり、ルネサンスにおける自然魔術からその魔術性が削られ「純化」「中性化」されるところに、バロック時代の科学的自然研究が生まれたということである。

こうして、「古典主義時代は、記述にまったく別の意味を賦与する。すなわち、物それ自体にはじめて最新な視線をそそぎ、ついで視線の採集したものを、滑らかな、中性化された、忠実な語で書き写す」(p.143、邦訳p.154)。つまり、「人文科学の考古学」という副題をもつ『言葉と物』の立場からすれば、「古典主義時代」に変化したのは、「記述する」(histoire) という言葉の働きの方であったのである。人は紡がれてきた物語の上にではなく、自ら新しく物をそれとして見つめ直し、「純化」された言語によって物のあるがままを忠実に書き記そうとするようになったのである。ルネサンスの人文学からバロックの自然科学への変化、物と物とが標本として並置される透明な空間、ここに新しい時代の「エピステーメー」があり、自然誌、博物誌が「博物学」となるのである。

2　ルソーの植物採集

(1) ルソーの植物採集の始まり

『告白』によれば、ルソーが植物採集を始めたのは、シャンベリで過ごした1731年からの数年間、「お母さん」ことヴァランス夫人と、ライバルでもあったクロード・アネと一緒に過ごしたときである。「アルプスのまんなかのこの町(シャンベリ) の位置は、植物学にはきわめて都合がよかった」(『ルソー全集』第一巻、白水社、p.226)。とはいえ、1730年代のルソーは「植物学についてはなんの観念ももたなかったので、一種の軽蔑と、さらに嫌悪さえ持っていた。そんなものは薬剤師のやる研究とみなしているだけであった」(同p.202) という。そして、当時のルソーにとっては、「これとは異なって、余りにも反対な趣味が徐々に多くなり、やがて他のすべての趣味を吸収してしまった。それは音楽のことだ。たしかに私は、この芸術のために生まれてきたに違いない」と述べ、植物への関心はさらに後退する。「完全に音楽に没頭した私は、他のことが考えられなくなった」「私の音楽熱は狂気になった」(同p.209) のである。

1736年からはシャルメットで再び「お母さん」と過ごす。「お母さん」はここでも「植物の採集をして楽しんでいた」が、ルソーはというと「他の研究に気を取られすぎていた」ために、「花や植物から気をそらせてしまった」(同p.270)。ただ、1739年に世に出た詩集『ヴァランス男爵夫人の果樹園』においては、自分は哲学の勉強をしているが、「それはたしかに崇高だが、くだらぬ作り話。頼りにならぬ仮説はじきに棄て、博物学の研究を喜ぶ。そこでこそ、プリニウスやニューウェンティットは彼らの学識で私を助け、私に考えること、眼を開くこと、見ることを教えてくれる」(Content d'étudier l'histoire naturelle. Là, Pluie et Niuwentyt, m'aidant de leur savoir, M'apprennent à penser, ouvrir les yeux et voir.) と述べている。まだこの時点では、「植物学への趣味」をもつ「時期にはなっていなかった」にもかかわらず、既に博物学は「考えること、眼を開くこと、見ることを教えてくれる」と語っていることは注目に値する。

こうして、ルソーは若いときから植物採集に触れてはいたが、植物学よりも音楽に大きな関心を抱いており、田舎での植物採集から離れ音楽の新しい記譜法の原稿を携えてパリに向かうことになる。パリに出たルソーは自作のオペラを発表し、ディドロと出会い『百科全書』の音楽の項目を引き受ける。その頃、たまたま懸賞論文の題名を目にして「別の世界を見、別の人間になった」(同p.381) ルソーは『学問芸術論』を執筆する。学問・芸術は進歩の功罪を問うテーマに対し、ルソーが意図的に否定的立場から論述したことは知られているところであるが、その中でルソーは、「われわれの庭園は彫像で飾られ、われわれの回廊は絵画で飾られています。一般の賞賛のまとになっているこれらの芸術の傑作が示しているものは何であると、諸君はお考えですか」(『学問芸術論』、岩波文庫p.45) と読者に問い、不平等の産物でありまたそうした不平等を再生産する芸術によって庭園という自然を感じる場が飾られていることを批判している。そして、「われわれはもはや市民をもっていません。あるいは、市民が残っているとしても、みすてられた田園にちらばっていて、貧乏でさげすまれて死んでゆきます」(p.46) と論じ、不平等で虚飾に満ちた社会よりも田舎での自然と触れ合う生活を擁護している。

続いて1753年に『人間不平等起源論』を発表すが、ここでは植物学や植物採集については触れられていないが、何度か博物学 (l'histoire naturelle) とビュフォンが参照されている。それらを順に追ってゆけば、まず人間の最初の言語に関する論述において、事物はそのはじめにおいて「その種類や種にかかわりなく、特殊な名前をもらった」(objet reçut d'abord un nom particulier, sans égard

aux genres, et aux espèces）が、やがて「さまざまな存在を共通の種による名称のもとに配列するために」(pour ranger les êtres sous des dénominations communes, et génériques)、「それらの特性と相違点」を知る（connaître les propriétés et les différences）ことが必要となった。そのため多くの「観察と定義」(des observations, et des définitions)、すなわち「博物学と形而上学」（de l'histoire naturelle et de la métaphysique）が求められるようになった、と述べている。「特性と相違点」を知るために「観察と定義」が必要となり「博物学」が生まれたという考え方は、まさに18世紀の博物学の誕生を意味している。そのほか、注でビュフォンやゴーチエ（Gautier Dagoty、1717～1785）の『博物誌考察』(Observations sur l'Histoire naturelle、1752）を参照しているが、リンネの名前はまだ登場していない。

1761年に入ると『新エロイーズ』が発表されるが、ここでも博物学、植物学、植物採集については言及されない。しかし、これまでにしばしば指摘されてきたように、その第１部で描かれるマッターホルンをはじめとする数々の名山をもち「アルプスの心臓」とも称されるスイス南部のヴァレー州の自然や、第４部書簡11でのいわゆる「エリゼの庭」についてのサン・プルーの描写やヴォルマール夫人との会話のやりとりなどに、ルソーの自然に対する思いが語られている。

たとえば、第１部書簡23では、空気の清澄さが心の平和を回復させ、地上的な卑しい感情が消えて清浄界（régions éthérées）の純粋さ（inaltérable pureté)、「静かな悦楽」(leur inaltérable pureté）を感じ、「存在することと思考することだけで満足する」(content d'être et de penser）と述べている。そして、自分の周囲にはまったく新しい対象、見知らぬ鳥や奇妙な未知の植物しか見られない喜び、いわば別の自然を観察する喜び、新しい世界の中にある喜びがあり、「精神と感覚を恍惚とさせる」という。このような「いっさいを忘れ、自分自身を忘れ、自分がどこにいるのかわからなくなる」ような感覚こそが、ルソーが田園に、散歩に、そしてやがては植物採集に、すなわち自然と触れ合う喜びであったように思われる。それは1760年代に植物学の手ほどきを受ける以前に既にルソーの中にあったものである。ルソーは『新エロイーズ』の中でそれを「自然の魅力」(les charmes de la nature)、「田園の魅惑」(enchantement du paysage）などと語っている。

『新エロイーズ』に続いて1762年には『社会契約論』を執筆する。ここには植物学、植物採集、博物学などのいずれも出てこない。この年ルソーは『エミー

ル』も執筆している。『エミール』でも、第一部の始まりの「植物は栽培によって（par la culture）つくられ、人間は教育によってつくられる」という有名な部分（岩波文庫（上）p.28）など、植物を例にあげながら教育について語る場面はあるが[18]、植物採集の話は一か所を除いて出てこない[19]。しかし、この一か所はルソー理解にとってきわめて重要であると思われる。

それは、第五編の半ば近くであるが、旅の「楽しみ」を博物学を例に取りながら、次のように語る場面である。「わたしたちは旅の初めと終わりのことだけを考えているのではなく、そのあいだ（l'intervalle）のことも考えている。旅そのものもわたしたちにとっては楽しみなのだ。(Le voyage même est un plaisir pour nous.）…エミールには、そんなに急いですることがなにかあるのか。ただ一つのこと、人生を楽しむことだ。(Mais de quoi jamais Émile peut-il être pressé? D'une seule chose, de jouir de la vie.）わたしには、馬で行くよりも愉快な旅のしかたは一つしか考えられない。それは歩いて行くことだ。わたしたちは、都合のいいときに出発する。好きなときに足を休める。うんと歩きたいと思えばうんと歩くし、そう歩きたくなければすこししか歩かない」(岩波文庫（下）p.158)。ここには、目的に拘束されない気ままで自由な旅の様子が描かれているように見える。

しかし、ルソーは次のように言葉を続ける。「わたしたちはその土地のすべてを観察する（on observe)。…わたしたちの心をひくあらゆるものをしらべてみ

---

[18] この箇所以外でも、植物への言及はいくつかあるが、特に第一部の終わりの方で、次のような指摘をしていることは注目に値する。すなわち、「動くもの、感官をもつものにとって、いっさいは教育によって与えられる。植物が漸進的な運動を行うものなら、感覚をもち、知識を獲得する必要がある」（Tout est instruction pour les êtres animés et sensibles. Si les plantes avaient un mouvement progressif, il faudrait qu'elles eussent des sens et qu'elles acquissent des connaissances、岩波文庫（上）p.91）という部分である。すなわち、ルソーは、植物も動物と同等に、外界との交渉のための「感覚」(sens）をもち、それによって得られた事柄としての「知識」(connaissances）をもつというのである。

ルソーが植物も知識を獲得するというのは、その前提として、「私たちは話をするまえに、人の言うことを聞きわけるまえに、人間はすでに学びはじめている。経験は授業に先だつ。乳母の顔を見分けるときに、子どもはすでに多くのものを獲得している。…一般的な知識はほとんど計算にいれない。それは知らないうちに、理性の時期よりもまえに獲得されるからだ」(岩波文庫（上）p.90）と述べているように、ルソーは意識以前の経験の中で無意識につかみとるものに重きを置いているからだということが理解できる。その際興味深いのは、この意識的なものとそれ以前の無意識的なものの二つを「人間の学問（la science humaine）を二つの部分に分けてみるとしたら」と述べていることであり、生まれた時からの経験によって獲得されたものも「学問（知)」と呼んでいる点であり、さらにそれを「人間の学問（知)」と呼び、「人間以外のものの学問（知)」も予想される点である。

[19] ビュフォンの名は本文に一回、注に一回でてくる。

る（on examine tout ce qui nous flatte）。…川がみつかれば、わたしたちはその岸辺に沿ってすすむ。茂った木立があれば、その蔭へ行く。洞窟があれば、はいってみる。採礦場があれば、礦物をしらべてみる。」すなわち、ここには気になったことを調べずにはおれないルソーがいる。したがって、ルソーにとって自由とは単に気ままであることではなく、何かの目的のための手段としてではなく、純粋な好奇心のために自由に時間を使って気になることを気の済むまで調べてみることである。そして、それが博物学であり、植物採集なのだと、次のように述べる。「歩いて旅をすること、それはタレス、プラトン、ピタゴラスのように旅をすることだ。…かれが足で踏んでいく財宝、大地が惜しみなくかれの目のまえにくりひろげる財宝（richesses qu'il foule aux pieds et que la terre prodigue à sa vue）を、どうしてしらべてみずにいられるのか、わたしは理解に苦しむ。すこしでも農業を好んでいるなら、かれが通っていく地方の風土に特有の産物や、その栽培法を知りたいと思わない者があるだろうか。博物学（l'histoire naturelle）にすこしでも興味をもっているなら、土壌をしらべもせずにある土地を、岩を削りとらずに岩山を、植物採集（herboriser）をせずに山の中を、化石をさがさないで石塚を過ぎて行く気になれるだろうか。」

にもかかわらず、ルソーは植物学を手離しで肯定しているわけではない。「陳列室のなかで博物学を研究している」人たちは、「名称を知っているが、自然界についてはなんの観念ももたない」として、本当の博物学に関心のある人は、「陳列室よりも豊富な標本」、すなわち「地球ぜんたい」を観察・整理しているという。ルソーはいろいろな場面で、植物の名を知ることよりもまず「見ること」が必要だと語るが、ここにも知識によって得られたものよりも五感を使って獲得した経験の方に重きを置くルソーの姿がうかがえる[20]。自然には限りない「財宝」が隠されており、それを見つける目をもたない限り、植物学は死んだものになってしまうと考える。ルソーにとっての植物採集は、学問のためにというよりも、自然を財宝として見る喜びだったのである。

しかし、『エミール』第三篇では、これと逆のように思われることを語っている。それは子供に「有用性の観念（une idée du mot utile）」を教える場面である（岩波文庫（上）p.405～415）。たとえばルソーは次のように述べている。「わ

[20]『エミール』第五部の後半の「旅について」では、「書物の悪用は学問を殺す。人々は読んだことは知っているのだと思い、自分はもうそれを学ぶ必要はないと思い込んでいる。…観察すべき事実はどんな種類のことでも、読んではならない、見なければならない。…知識を得るためには…旅のしかたをこころえていなければならない。観察するためには、見る目をもっていなければならない」と述べている（岩波文庫（下）p.274ff.）。

たしが生徒と一緒になって太陽の運動と方向を知る方法を研究しているとき、とつぜん、かれがわたしをさえぎって、こういうことはみんななんの役たつのか、とたずねたとしよう。…わたしはかれに話してやるだろう。旅行の有益なこと、商業の有利なことについて、それぞれの風土に特有な産物についてさまざまな民族の風習について、暦の利用について、農耕に必要な季節の循環の算定法について、航海術について、海上で方向を定め、どこにいるのかわからなくても正確に航路をすすむ方法について。政治学、博物学、天文学、さらに道徳も、そして国際法も、わたしの説明のうちに含まれることになり、わたしの生徒にあらゆる学問についての偉大な観念をあたえ、それらを学びたいという大きな望みをいだかせるようにするだろう（La politique, l'histoire naturelle, l'astronomie, la morale même et le droit des gens entreront dans mon explication, de manière à donner à mon élève une grande idée de toutes ces sciences et un grand désir de les apprendre)」(岩波文庫（上）p.410)。ルソーは続けてエミールとの会話をさしはさみ、最後に「天文学ってなにかの役にたつもんですね(l'astronomie est bonne à quelque chose)」(同p.415）と語らせる。ここでは、学問を学びたいという気持ちを育てるためとはいえ、学問の「有用性」という点から語られており、博物学もその一つに算定されているのである。

（2）スイスでの植物学の出会い

『エミール』第四部をめぐって1762年6月6日に逮捕状が出たが、それを受けてルソーは1762年から1765年までスイスで逃亡生活を送った。ルソーがしばらく滞在することになるヌーシャテル地方のモチエ村に到着したのは7月10日のことであった。ルソーが植物学の手ほどきを受け、植物採集を本格的に始めたのはこの時である。

この時のことをルソーは『告白』で次のように述べている。「1764年に、友人のデュ・ペールー氏（M. du Peyrou）といっしょにクレシエにいたとき、われわれは小さな山にのぼったが、彼はその頂上に感じのいいあずまやを持っていて、『見晴亭』と呼んでおり、まさにそのとおりだった。その頃私は植物採集をはじめていた（Je commençais alors d'herboriser un peu)」(『ルソー全集』第一巻p.251）という。ところが、それに続けて、「のぼる途中、茂みのあいだを眺めていた私は、喜びの叫び声をあげる。『あっ、ツルニチ草がある。(Ah ! voilà de la pervenche !)』じっさいそうだった。デュ・ペールー氏は、私が夢中なのに気がついたが、その原因を知らなかった」と述べ、「その原因」とは、1736年

の初夏にシャルメットで「お母さん」と一緒に散歩に行ったとき、「お母さん」が「ほら、ツルニチ草がまだ咲いているわ。(Voilà de la pervenche encore en fleur.)」とルソーに語ったという思い出のことである。ルソーは、「お母さん」との植物採集のことを覚えていたのである。

だが、ルソーに植物学の手ほどきをしたのは、デュ・ペールーが最初だったのではない。既にディヴェルノワのジャン＝アントワーヌ（Jean-Antoine d'Ivernois、1703～1765）がいた。1739年ハラー（Albrecht von Haller、1708～1777）は『スイス植物誌』(Historia stirpium)[21]を執筆したが、その際スイス西部のクル・デュ・ヴァンを訪れ、ディヴェルノワはガニュバン（Abraham Gagnebin、1707～1800）と共に彼の案内役をつとめていた。ディヴェルノワは、1745年頃自らその土地の植物について1000を超える種類の図録を執筆し（未刊行)、トゥルヌフォール、ハラー、リンネたちの分類について解説している。ルソー自身も『孤独な散歩者の夢想』第五の散歩及び第七の散歩において、自分が植物学の手ほどきを受けたのはディヴェルノワであると述べている[22]。

ガニュバンはスイスのジュラ地方のフェリエールの村に住んでいた自然学者であったが、植物学に関する知識と資料の膨大さで有名であり、「植物学大学」という地域のグループを組織していた。その会員でもあったデュ・ペールーに紹介される形でルソーはガニュバンと知り合った。そして、ルソーは1765年4月29日のデュ・ペールー宛の書簡の中で、自分はまだ経験的に植物をあまり知っていないので、15日間ガニュバンと共に過ごそうと思うと述べ[23]、実際その年の6月14日から27日までの間、ガニュバンのいるフェリエールに滞在し[24]、ジュ

---

[21] ハラーがスイス植物誌に関心を抱いたのは、既にスイスの自然科学者であり作家でもあったショイツェル（Johann Caspar Scheuchzer、1702～1729）がアルプスの博物学研究を行い、詩集『アルプスの山々』でアルプスの魅力を伝えていたことの影響である。ショイツェルは1726年に3000万年前の地層からオオサンショウウオの化石を発見したことでも知られるが、オランダ商館に勤めていたドイツ人医師のケンペルの遺稿を英語に翻訳させて『日本誌』として刊行したことでも知られている。1778年にルソーが亡くなった時、ルソーの書斎からハラーの『スイス植物誌』の初版が発見されている。

[22] 「私はもういい年になってから、ディヴェルノワ博士にはじて植物学の手ほどきを受けた。そして、その後、旅から旅を重ねるあいだにも、うまいぐあいに植物採集はできて、植物界についての一応の知識を得ることができた」(『ルソー全集』第二巻p.386)。第五の散歩における言及については後述のとおりである。

[23] 「今まで以上に植物学に熱中していますが、実地に植物をまだあまりよく知らず、体系的に研究はできないと、恥ずかしながらわかっております。しかしながら、それでいやになるというわけではなく、季節がよくなったら、ガニュバン氏のところに行って、二週間ほどお世話になり、少なくとも自分でリンネの勉強ができるようになるつもりです」(『ルソー全集』第十四巻p.262)。

[24] ガニュバンの自宅は博物館（植物以外のものも）のようだったらしく、ガニュバンは来客を宿泊

ラ山脈のフランシュ－モンターニュのふもとにあるショー・ダーベルの湿地帯や泥炭地などで植物採集を行い、7月には二人でスイス西部のクル・デュ・ヴァンで植物採集を行っている。

以上のように、ディヴェルノワとガニュバンの二人こそが、1735年に出版されたリンネの『自然の体系』も含めた伝統的な植物学と植物採集の方法をスイスに滞在していたルソーに本格的に伝授した人物である。しかし、そのような幸せな日々も長くは続かず、1765年9月には立ち退きを余儀なくされ、ベルンより退去命令が出る10月まで、ビール湖のサン・ピエール島に避難した。ここでもルソーは自然を気に入り、植物採集を楽しむことができた。『孤独な散歩者の夢想』「第五の散歩」の冒頭では、この島での生活を、「これまでに住んだどんな場所も…ビエンヌ湖のまんなかにあるサン＝ピエール島ほど、私をほんとうに幸福にし、せつないほどの懐かしさをいまだおぼえさせるところはない」と伝えている。

注目に値するのは、しばらく島の自然の美しさを述べた後の次のような言葉である。「では、その幸福とはどんなものだったのか、またそれを楽しむということは、どういうことをさしていたのか。…あの貴重なファル・ニエンテ（無為、farniente）が、そうした楽しみのなかで第一の、主要なものであった。その甘美な楽しみを、私は心ゆくまで味わいつくそうと思った。で、島に滞在しているあいだに私のしたことはなにかというと、じっさい、無為に身を委ねた人間の結構至極で不可欠な仕事たる暇つぶしに尽きた」（『ルソー全集』第二巻p.363）。島での「無為」「暇つぶし」のすべてではなかったにしても、植物採集はその一つであった。ルソーは次のように書いている。「うっとおしい書類や、いっさいの古ぼけた本のかわりに、私は部屋を花や乾した草で満たして行った。というのも、当時、植物学に熱中しばめていたからである。植物学の趣味を私に植えつけたのはディヴェルノワ博士で、私はたちまちこれにとりつかれた。骨の折れる仕事はもう沢山で、私に必要なのは、気に入った、怠け者でも喜んでやれるような苦労しかいらない気晴らしの仕事であった」（『ルソー全集』第二巻p.364）。リンネの『自然の体系』を抱えて植物採集を行い、『サン・ピエール島植物誌』を書こうとすることは、「気晴らし」だったのである。

1765年10月に退去命令を受けたルソーは1766年1月にヒュームのいるロンドンに逃れた。しかし、手紙にまつわるヒュームとの不仲という有名な話も手伝っ

させることも多く、ルソーはその多量な標本を見るためにガニュバンの家を訪れたと思われる。

てか、イースト・ミッドランズのダービーシャー（Derbyshire）にある館を提供するというダヴンポート（Richard Davenports）の案に従って、3月22日にルソーはそこに移り住む。そして、ルソーは犬を連れてその地を歩きまわり、その地域の植物を調べた。その地域は、現在でもアシュボーンの観光地であり、谷や川などの自然、地形などで有名で、訪れる人も多い。また、そこには珍しい植物がみられ、植物学的にも関心を持たれている場所でもある。

ルソーはその地で、後にも関係が続くことになる[25]当時22歳のサー・ブルック・ブースバイ（Sir Brooke Boothby、1744～1824）と知り合う。彼は「ルナ協会」[26]や「リッチフィールド植物学協会」(Lichfield Botanical Society)[27]などで知的な活動をしており、ルソーをそれらグループと引き合わせることになる。

しかし、いくつかの疑念に悩まされていたルソーは、1767年5月にその館を去りフランスに渡り、1768年6月にはリヨンに移り、グランド・シャトルーズ周辺の山々に植物採集に出かける。そこは、生まれ故郷ジュネーヴや、ヴァランス夫人と出会ったアヌシー、彼女と植物採集をしたシャンベリにも近く、デュ・ペールーやディヴェルノワ、ガニュバンたちと植物採集に出かけたジュラ山脈の麓にも近い。さらにアルプスを眺めることのできるモンカンの農家に移り、そこでも植物採集に出かけている。

1770年4月ルソーはモンカンを去り、ついにパリに向かう[28]。こうしてパリで『告白』が完成し、出版を禁じられていたルソーは『告白』の朗読会を行うが、それも禁じられてしまう。彼に残されたのはパリでの植物採集だけであった。この頃に書かれたのが植物学に関する原稿、すなわち「植物学についての手紙」「植物学の記号」「植物用語辞典のための断片」「植物学断片」である。

1770年代前半に書かれた「植物学に関する手紙」はドレッセール夫人に送られた8通の手紙を通して、彼女の娘が身近な植物を説明できるように植物学の基礎を教えるというものである。たとえば「第一の手紙」では、「自然の研究は…魂を観想にいばんふさわしい対象で満たして、魂を益する」が、自然の中で

---

[25] たとえば彼は10年後に『告白』の原稿をパリに届けてくれたり、『告白』の英語訳の刊行に助力してくれた。

[26] チャールズ・ダーウィンの祖父であるエラズマス・ダーウィン（1731～1802）が1765年に立ち上げた組織で、毎月満月の夜に会合をもったことから、この名がついた。

[27] エラズマス・ダーウィンがリンネの著作を英訳するために組織したもので、「協会」とはいっても、エラズマス・ダーウィン、サー・ブルック・ブースバイ、ジョン・ジャクソンの3人しかいなかった。

[28] その途中でルソーはビュフォンを訪ねている。

も植物の世界は「もっとも美しく、もっとも豊か」と述べている[29]。また、「植物の名前などなに一つしらなくても、たいへん立派な植物学者になることはできる」が、大切なことは「眼にするものをきちんと見るすべを身につけておく」であるという。

しかし他方「植物用語辞典」では、「命名法を勉強しないで、どうして植物の研究にうちこむことができますか」「植物学の研究を認めながら命名法の研究を退けるのは、もっともばかげた矛盾撞着にはまりこむことである」と述べている。「植物学辞典」はリンネやトゥルヌフォールなどの植物学者から借用・援用していることが明らかになってきたが、それでもリンネたちの命名法の研究が植物学において欠かせないものであるというルソーの主張は、植物を学問的対象にしようとする植物学は、分類と命名法という論理性が欠かせないと考えていたといってよいであろう。

「植物学用語辞典」は、序説の冒頭で「植物学の第一の不幸は、誕生するとすぐ医学の一部門とみなされてしまったことである。おかげで…植物そのものの認識はなおざりにされるということになった。…植物学に対するこの誤った見解が研究を長く偏狭なものにしてきた。研究は有用な植物にほぼ限定され」、「乳鉢ですりつぶすことしか考えていない」医学的関心のもとでは、「薬の知識は十分にあっても、植物についてはほとんど知るところがないという事態が生まれたのであった。これが私の主張しようとすることがらのすべてである」と述べている。死んだ植物の効能を知ろうとする医学的本草学に対し、生きた植物をそのまま知ろうとすることとは決定的に違うという主張である。

では、「植物そのものの認識」「植物について知るところ」とは一体何を意味するのか。ルソーは、「植物を知っているといちばん得意であった人たちが、その構造についても組織についても、いささかの考えももちあわせてはいなかった」と続けている。すなわち、植物に関する知識は、長い間医学的関心のものにあり、植物の純粋に学問的な研究がなされてこなかったが、ジャンとガスパールのボアン兄弟による命名法の先駆以降（注15参照）、イギリスのレイやフランスのトゥルヌフォールたちが植物学という学問の発展に寄与したと述べる。ここからも、ルソーがバロック以降の博物誌の博物学への質的転換、本草学の植物

[29]「植物用語辞典」においても「博物学のうちでもっとも好ましい第三の部門」と述べ、「植物学断片」の冒頭でも「植物学は博物学の一部門であり、植物界をあつかう。植物界は自然の三界のうちでもっとも豊かで、変化に富んでいる。植物学は博物学者ナチュラリストの研究においてもっとも重要な部門である」と述べている。

学への質的転換についての認識をもっていたことがわかる。ルソーは植物学の学問性は、構造と組織による分類と命名によって保証されるものだと考えている。

このように、ルソーは薬草学に対して批判的であり、純粋に学問的な関心によって進められる植物学を肯定するが、「植物学断片」では、植物採集があたかも自然美の賞賛であるかのように、次のように語っている。「無知と偏見は言うはずである。さて植物学はいったいなにの役に立つのかね、と。…あらゆる余暇の使いみちのうちでも、…宇宙とそのさまざまの部分の調査を少なくとも遊びとして許してほしい」「自然の観照に興じる閑人」「自然はみずからの形をすべてあれほど優美にしあげ、…これを眼にする者は眩惑され、想像を揺さぶられずにはいない」(以上断片一)、「自然のもっとも心にふれる美しさを、いつもなにかしら身の利益になることとごっちゃにしたりはせずに、感受する人はいないというのか」「ああ、自然を愛することを知ろうではないか。自然を探究し、研究し、認識することを知ろう。自然の美しさに讃嘆することを知ろう。…自然と私たちとのあいだにじっと留まるすべを、無為から、倦怠から、そして自分自身と他人にとって重荷であることから、いやされるすべを学ぼう。…取りつきやすく無邪気な魅力ある楽しみを自分に授けようではないか。植物の研究が私の魂を清めるものなら、私はそれで十分である。」(以上断片二)、「一人の閑人の気晴らしにすぎない」「私は、この眼が植物の美しさを享受することを、汲みつくすことを。できることなら、これに堪能することを望んでいる。」(以上断片四)。

すなわち、ルソーは、一方でリンネたち植物学者のように、植物への博物学的な構造と組織への関心を求めるが、他方で自然美の讃嘆者となることを求め、植物採集はそれにひきつけられ、とりつかれ、とらわれ、飲み込まれた人の慰み(amusemet)、熱狂(engouement)、常軌逸脱(extravagance)、酔狂(fantaisie)、狂気(folie)であり、無為・無益なものであるともいう。このような自然の研究と自然の讃嘆という二重性を、われわれはどのように考えればよいのか。

再びフーコーの言葉に耳を傾けてみよう。先に引用したように、フーコーは、記述(histoire)が観察されたものにまつわりつく意味論的網目をそぎ落とすところに博物学の誕生を見た。それは記述の問題であると同時に、観察という視線のあり方の問題でもあった。フーコーは次のようにいう。バロック時代に入り、「観察というものは、ある種のものを体系的に除外することを条件とする感覚的認識となった」。つまり、自然を見ること、観察することから、「ある種の

もの」がそぎ落とされた述べ、博物学の誕生は新たなものの獲得ではなく、むしろ「排除」によって可能になったのだと説明する。「ある種のもの」とは、「不確実で変りやすく、だれにも容認されるような判明な要素への分析を許さない」もの、色彩のような「ほとんど有用な比較の基礎とはなりえない」ものである。フーコーは、リンネの『植物哲学』の「植物のうちで、眼にも触覚にも訴えぬいっさいの偶有的要素は…捨て去られねばならない」という言葉を引用しながら、そのような偶有的要素としての味や色彩ではなく、「明証性と延長の感覚であり、したがって万人に容認されるように、対象を…分析する感覚」としての視覚に「独占的な特権」があたえられるという。したがって「観察するとは、見るだけで満足すること（Observer, c'est donc se contenter de voir)、体系的にわずかな物しか見ないこと（De voir systématiquement peu de choses)、表象のやや混乱した豊かさのうちで、分析されうるもの、万人に認められうるもの、だれにでも理解できる名をもちうるものだけを見ること、である」(p.146、邦訳p.157)。

こうして、ルソーが植物採集を行った理由が明らかとなる。自然の研究か自然の讃嘆かという二重性ではなく、フーコーがいうところの意味論的網目がそぎ落とされ、直接に自然そのものを観察することが可能となった18世紀の博物学的な視線においては、言葉による神学的にも人文学的にも意味付けられることのない「生身の存在がむきだしのままあらわれ」ることの喜びをルソーは感じていたのである。たとえばルソーは次のように述べる。「植物学者が、大地なる母の衣を織りなした工匠の神技と美妙の趣味にうっとりと讃嘆するのは、この絢爛たる衣裳をじかに調査し、この溢れんばかりの財宝そのものを研究しつつのことである」(「植物学断片」断片一)。

結

18世紀において伝統的な自然誌・博物誌がどのようにして博物学へと変化したかをフーコーを援用しながら検討し、それを踏まえた上でルソーが示した植物採集、植物学への関心を、彼の生涯と著作の流れに沿って検討した。

これらを通して、1762年に植物学の手ほどきを受ける前から、ルソーは既に植物学的な「純粋に」見ることとその喜びについて語っており、その意味においてルソーも18世紀の博物学の時代に生きた一人だということが理解できる。ルソーが考える「自然に帰る」ということは、18世紀の博物学の視線をもって

自然に臨むことであった。かつて『エミール』で語っていたように、「大地が惜しみなくかれの目のまえにくりひろげる財宝」を目にするとき、人は自然の不思議さに心を奪われて「観察」し「しらべてみよう」と思うのである。

『エミール』執筆の時代はまだ植物学の手ほどきを受けていなかったということをあわせて考えれば、「およそ植物の研究ほど、私の生まれつきの趣味に合ったものを知らないし、ここ十年間の田舎での生活は、ほぼたえざる植物採集でしかない」(『告白』第5巻) という言葉は、「生まれつきの趣味」というルソーの生涯変わらない自然への関わりを語っており、それは植物採集にのみ限定されるべきではなく、彼の広く自然全般への関心を示していると理解できるのである。

しかしそれでもなお、次のような自然の中での安らぎについて語る言葉を目にするとき、それは果たして単に18世紀の博物学の「純粋」な「観察」を意味していたかどうか、疑問が生まれるところでもある。「植物学のために私がしたすべての遠出、心を打つものに出会った場所のさまざまな印象、その場所に触発されて生まれたいろいろな考え、そこにからんできたいろんな出来事、すべてそうしたものは私にいろいろな印象を残したが、同じ場所で採集した植物を見るたびに、それが心によみがえってくる。…だが、もうあのすばらしい各地の野を駆けめぐることのかなわなくなったいまでも、私の標本を開きさえすれば大丈夫、たちまち昔の場所までそれが私を連れて行ってくれる。そこで摘んだ植物の断片がありさえすれば、あの素晴らしい光景 (magnifique spectacle) がすっかり思い出せる」「私が植物学に愛着をおぼえるのは、それに付随する一連の想念のせいである。植物学は私の想像力にあらゆる想念をひき寄せ、呼び覚まし、それがまたいっそう想像力を喜ばせる。牧場、水面、森、孤独、そうしたすべてのものにとりかこまれているときに味わえるとりわけ平安と安らぎ、これが植物学によってたえず私の記憶によみがえってくる」(『孤独な散歩者の夢想』「第七の散歩」末尾)。